

東電、柏崎刈羽原発6号機を再稼働 3月18日営業運転へ発電機を確認

2026/2/9 14:17 (2026/2/9 16:00更新) | 日本経済新聞 電子版



新潟県の東京電力柏崎刈羽原発=共同

東京電力ホールディングスは9日、柏崎刈羽原子力発電所（新潟県）6号機を再稼働した。1月21日に約14年ぶりに再稼働したが、核燃料を操作する機器の不具合で23日に停止していた。当初計画より3週間遅れの3月18日の営業運転を目指す。1週間ほどかけて、営業運転に向けた次の関門となる発電機を回して電気を生み出す工程に進む。

2月9日午後2時、燃料の核分裂反応を抑える制御棒を抜いて原子炉の起動を始めた。全部で205本ある制御棒を順番に抜く。同日午後3時20分には核分裂反応が安定して続く「臨界」に到達した。21日の再稼働では、この制御棒を抜く工程で「異常」が判明していた。

制御棒に異常がなければ、原子炉から正常に蒸気が発電のためのタービンに伝わるかを確認する工程に入る。原子炉は起動後、5日ほどかけて炉内の温度や圧力を高める。炉内の水が温まってできた蒸気は、配管を通過してタービンに到達。タービンが蒸気で満たされ、回転が始まる。

タービンが正常に動くことを確認できれば、動力を発電機に伝え電気を生み出し始める。配管など一連の設備に少しでも穴があると、蒸気が漏れて正常に設備を動かさない可能性が出てくる。

東電は水を使って配管に穴がないかなどの確認を重ねてきたが、実際に蒸気を発電機に通して確認することは難しいという。柏崎刈羽原発の稲垣武之所長は「（発電機に蒸気を送る配管など）蒸気系の気密性が維持されているかなど慎重に確認していきたい」と述べていた。

東電は発電を始める時期を2月15日と計画している。発電し始めた後は発電量を徐々に上げながら設備に問題がないか確認する。2月下旬には一度原子炉を停止し、設備全体を点検する。異常がなければ改めて原子炉を起動し、段階的に発電量を最大まで引き上げ、営業運転に向けた検査に入る計画だ。

柏崎刈羽原発の検査工程	
2月9日	原子炉起動・昇圧。高温の蒸気を使って原子炉や冷却設備を検査
2月15日	発電機を起動
2月16日	発電した電気の送電を開始
2月下旬	一度原子炉を停止。設備全体を確認
2月下旬～3月初旬	再び原子炉起動。段階的に最大出力に
3月18日	原子力規制委の検査。合格すれば営業運転に

(注) 異常があれば日程見直しの可能性も

6号機は当初1月20日に再稼働予定だったが、制御棒の引き抜き試験中に起きた不具合で1日延期した。21日に制御棒を抜いて再稼働したが、制御棒の動作をコントロールする制御盤で異常が見つかった。原因となった電子部品に対策を講じ、再び原子炉を起動した。

2011年の東日本大震災での福島第1原発事故で実質国有化された東電。1月26日には5年ぶりとなる新たな経営再建計画を公表した。再建計画は6号機を25年度中、7号機を29年度中に再稼働することを前提とした。

【関連記事】

- ・ [柏崎刈羽原発6号機を9日に再稼働 東京電力、3月18日に営業運転](#)

- ・ [原発ゼロ14年、東京電力の電力販売2割減 再稼働テコに戦略立て直し](#)
- ・ [東電、次の原発稼働へ信頼回復途上 14年費やし重い一歩も経営苦しく](#)

BUSINESS DAILY by NIKKEI

企業の最前線、朝メールで [ご登録はこちら](#)

会員
限定

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.